

平家物語と祇王

— 妓王寺と祇王井 —

『平家物語』は、平家一門の栄華と没落を描いた軍記物語で、鎌倉時代に成立したといわれます。この巻第一に「祇王」の段があり、白拍子「祇王(妓王)」の悲哀の物語を綴っています。

都で評判の白拍子(舞姫)に祇王・祇女という姉妹がおり、祇王は平清盛の寵愛をうけ、豊かな暮らしをしていました。それから三年後、若き白拍子の名手、佛御前が清盛邸へ参ったところ、清盛が帰したのを祇王のとりなしで召し返します。その舞を見た清盛は、佛御前に心が移ってしまいます。清盛から退出を命じられた祇王は、

萌え出づるも枯るるも同じ野辺の草
いづれか秋にあはではつべき

の歌一首を泣く泣く書き残し、清盛のもとを去ります。

その後、祇王は、妹の祇女、母刀自とともに出家し、嵯峨野に庵を結び仏門に入りました。やがて、佛御前も後を追って尼となり、四人は一緒に仏道に励み、往生を遂げたというお話です。

野洲には、この一話とともに祇王井の伝説が伝えられています。妓王寺に伝わる安永5年(1776)の「妓王寺略縁起」などによると、祇王は、近江国野洲郡江辺莊(現在の野洲市永原・中北・北付近)に生まれ、京に上り白拍子となり、平清盛の寵愛を受けました。故郷の村人が水不足に苦しんでいたのを思い、祇王が清盛に願い出て開かれた用水が「祇王井」であるといいます。出家後、祇王は仏門にいそしみ、38歳で生涯を閉じますが、その恩恵をたたえて建立された寺は「妓王寺」と名づけられました。

明治22年(1889)には、町村合併により義王村(のち祇王村に改称)が誕生し、その名は今も「祇王学区」の地名として親しまれています。



妓王像(妓王寺)

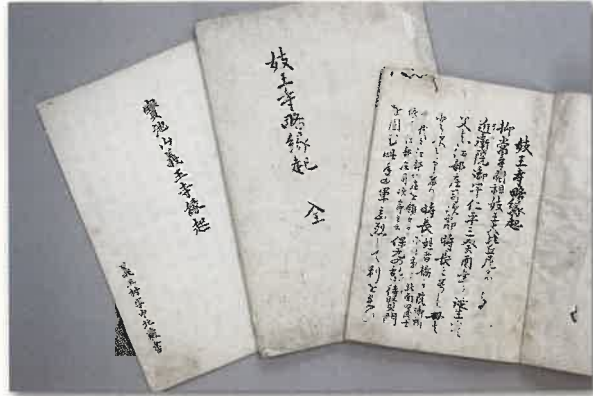


浮世絵「六波羅御所清盛公遊宴之図」(妓王寺)

妓王寺

村人が祇王の遺徳を偲び、菩提を弔うために建立したといひ、現在の堂は江戸時代、17世紀に再建されたと伝えられます。江辺荘のほぼ中央、野洲市中北の集落にある浄土宗の尼寺です。本尊阿弥陀如来坐像、両脇に妓王・妓女、刀自(閉)・佛御前の木像を安置し、境内には供養塔がまつられています。

毎年8月25日、祇王の命日には、祇王井に関わる十か村の人々が参り、法要が勤められます。



妓王寺略縁起(妓王寺)
安永五年(一七七六)



妓王寺



供養塔



妓女像(左)・妓王像(右)



刀自像(左)・佛御前像(右)

祇王井の流れ

祇王井は、野洲川を水源とする三里、約12kmの古くからの用水です。用水のことを「ユ」または「イ」といい、祇王井は「大井(おおゆ)」とも呼ばれます。野洲川の三上地先に始まり、雷波乙の生和神社裏で東西に分かれます。東祇王井は、雷波甲の町並みの東裏手を通り、永原へと流れています。西祇王井は、中之池川と一体になり、童子川に合流します。そして下手で再び合流し、琵琶湖野田浦へ注いでいます。

祇王井の水利にかかわる村々は、江辺荘三か村の永原(上町・下町・江部)・中北・北のほか、四ツ家(野洲の内)・行合(行畑の内)・市三宅・久野部・五之里・澤(雷波乙)・新町(雷波甲)の七か村を加えた十か村です。長い歴史を伝える用水であり、今なお田畑を潤し、その流れは大切に守り続けられています。

水源跡碑 三上(七間場自治会館横)

野洲川の取水口付近に建てられた記念碑。祇王井は、現在は野洲川幹線水路から水を引いている。



掛越樋(水害対策のため撤去) 行畑(行事神社裏・中山道沿い)



埋樋で旧家棟川の下を抜ける 永原(上町・屋棟神社横)



「史蹟 祇王井川」碑 野洲(四ツ家)

付近から「領境大井川床限」の石柱もみつかった。



東西分岐点付近 富波乙(生和神社横)



土安神社 永原(江部)

伝説によると、流路を決められずにいたところ、童子が現れ「予が引く繩にしたがって川溝を付けよ」といい、野洲川から琵琶湖野田浦まで縄印を引き渡して去った。こうして一日一夜のうちに成就したのが祇王井であるという。西祇王井は「童子川」に合流し、土安神社には童子がまつられる。



町並みの裏手を流れる 永原(下町)



大井の参会

祇王井開削の日と伝えられる3月15日(現在は直近の日曜日等)に、野洲川取水口で法要が営まれる。水源地跡に祇王井(大井)十か村の自治会長が参集し、妓王寺住職が読経を勤める。



井のぼり

ユノボリ・イノボリといい、永原・中北・北の三大字の人々が、祇王井の見回りや川浚えをする行事で、4月上旬、春先の田植え前に行われる。



伝妓王屋敷跡・妓王碑 中北
 妓王寺の北約二百m、中北と北の集落の間に、妓王屋敷跡と伝えられる所がある。「妓王碑」は大正六年(一九一七)に建立され、妓王や妓王寺、祇王井の来歴などを記している。



北村季吟句碑 北(自治会館前)
 野洲郡北村(現・野洲市北)出身の俳人、歌人である北村季吟(一六二四〜一七〇五)の句碑。「祇王井にとけてや民もやすこほり」の句は、祇王井に溶け込むように慣れ親しんでいる人々のことが想い起こされる。

平家終焉の地 (野洲市大篠原)

壇ノ浦の戦に敗れた平宗盛は、鎌倉へ下り源頼朝と対面した後、源義経に連れられ京へ上ります。途中、篠原で斬首され、首は京へ帰り、胴はこの地に葬られたと伝えています。かつて宗盛胴塚の前に首洗池があり、その前の「蛙不鳴池(かわずなかずのいけ)」には、無念が通じたのか、蛙が鳴かなかったといひます。江戸時代の名所案内『木曾路名所図会』の挿絵にも描かれています。



宗盛胴塚

『木曾路名所図会』文化2年(1805)刊